

『東京百事流行案内』

文化学園大学教授(日本文学・日本文化論担当) 近藤 尚子

『東京百事流行案内』(以下、本書)は一冊、刊記には「明治二十六年九月二五日印刷／同年十月十二日発行」とあり、「定価二十五銭」の朱印が押してある。編集兼発行印刷者は「東京平民 大川新吉」である。縦22.5cm、横15cm、本文は序文を含め55丁。明治26年の刊行ということで、ある程度の部数が出版されたと思われ、他にもいくつかの所蔵が知られる。『日本近代思想大系』では、解題に「明治二十六年の刊行であるから、本大系の収録史料の年代幅を超えているのだが、流行現象を一書にまとめ、しかも豊富な図版を持っている点で、まことに貴重な史料なので、あえて収録することにした」として、第23巻[流行]の最初に置いている。そのことから本書の価値は明らかであろう。

まず案内子の序、夢遊居士の「流行談」が置かれ、3丁裏3行目の【新製人形思ひざし】から「流行案内」の本文となっている(以下、引用に際しては、現行の表記に改め、ふりがなは必要箇所のみ示す)。

巻頭には「衣」関係の項目が多く並んでいるようであるが、全体を統一するような配列の基準は見出せない。試みに21丁裏から28丁表の項目を挙げると、「懐中紙入・氷屋の腰掛・火鉢の流行形・籠行燈・大塚氏貯金法の流行・古流生花の流行・小供の胸掛・束髪カナリヤ・新橋芸妓社会呪法の流行・古帛の流行・ちり靴・盆栽」となっている。しかも、本書には目次がなく、本書の全体がどのような項目からなっているのかを見渡すことも困難である。

どのような項目が掲載されているのかをさらに細かく見る。上に述べたように、配列は脈絡を欠いているので、便宜 1.服飾(和装) 2.服飾(洋装) 3.食 4.調度品と生活雑貨 5.その他 と分類して挙げる。

1. 服飾(和装)19項目 女髷の新形・駒下駄類・紺足袋・汗襦・冬着男物流行柄・冬着女物流行柄・帯止・羽織紐・書生の角帯・冬着相場・帯地相場・男女袴地の流行模様・全盛拍子春衣の模様・袴・銘仙の流行・婦人袷布・婦人合羽・黒纏子の男帯・あづし
2. 服飾(洋装)8項目 散髪・髻・帽子・小供の胸掛・靴・洋服の流行形及冬着柄行・履足袋・シヤツ
3. 食 3項目 ちり・麦飯・うづら豆
4. 調度品と生活雑貨 53項目 新製人形思ひざし・煙草道具・櫛笄簪類・靴・涼提燈及団扇・夏季用座布団・西洋形花籠・時計の流行形・時計鎖・指環・ステッキ・段通・懐中紙入・氷屋の腰掛・火鉢の流行形・籠行燈・盆栽・吃驚箱・蝙蝠傘・襟巻・手袋・肩掛・手拭・洋靴・呼鈴附郵便受函・牛乳受函・コップ・安全剃刀・たたみ布団・鉄瓶及茶托・ランプ類・髷入流行形・シヤゴマのかもじ・自転車・当用筆筒・七宝織・実印及認印・陶製の標札・軸物・門口の呼鈴・手水鉢・臘梅・紙腔琴・防盜櫃・雑巾桶・補聴器・眼鏡・小供用毛糸帽子・蠟燭台・弁当箱・灰吹・便器・座布団
5. その他24項目 大塚氏貯金法の流行・古流生花の流行・束髪カナリヤ・新橋芸妓社会呪法の流行・古帛の流行・蒔莢版・魚鳥切手・羽子板の押絵・駒下駄押絵の由来・清元の流行・写真人名刺の流行・歌川派の十元祖・年玉贈答品の景況・額招牌・偽転業見切売の流行・雪駄の流行水撒の爲めに止む・客前の菓子・居宅入口の流行形・古錦絵及古郵便切手・播種季節・煎茶式流行の萌し・二人綱曳車・引札の新仕段・景気餅の流行

項目の数え方や分類のしかたに多少の揺れはあるだろうが、項目数で107。江戸時代に流行した「～百珍」がみごとに百をそろえているのに比較すると、先

述のように目次もない本書では「百事」は「たくさん
の」というほどの意味だとも考えられるが、一応タイト
ルの百にほぼ合致している。

項目の内容としては、服飾では「和装」と分類した
ものが、洋装より多い。項目名を見ただけでも、洋装
の衣服に関しては「洋服の流行形及冬着柄行」と「シ
ヤツ」しかないことがわかる。『日本近代思想大系』の
解題では本書を「文明開化が終り、鹿鳴館時代も過ぎ
た時代の東京における流行の総括」としている。食に
関しては3項目しかなく、半数以上を占めるのが、「調
度品と生活雑貨」に分類したものである。その中には
江戸以来の「煙草道具」や「盆栽」などもあるが、「ス
テツキ」「コツプ」「ランプ類」などの新たに生活に
入ってきたと思われる道具類も多く、正しい使い方を
していないことについて批判的に述べるものが多い。

記述のしかたは細かく具体的である。まず「流行」
と銘打っているだけあって、変化をきちんととらえてい
る。たとえば「自転車」には「四五年以来すたりて居た
る自転車又々大流行となり至極便利のものなれどメリ
ヤス股引の尻からげの輩は余り体裁よからねば何ん
とが注意したきものにこそ」とあり、後半には批判
的記述も見える。「蝙蝠傘」には「専売品舶来骨流行
の次第を云へば一昨々年頃より舶来して流行せしが
安くも絹張にて三円搦みのものなれば取て販路の広
きと云ふ程にもあらず(中略)舶来骨追々安くまた日
本模造次第に高み同時に細工も見事になり本年の
仕入期には専売品八分の姿となりて遂に毛織子張
の下等は小売一円搦みに落込みたれば下婢小僧も
専売品の蝙蝠傘を用ゆるにぞましてゴム綾及び甲斐絹
張りの如きは専売品に非ざれば見向きも遣らぬ人気
となり茲に従前の製品は一切店の置物と化し去るの
景況なり」とある。この蝙蝠傘の記述にみられるよう
に、価格について詳細に記述することも特徴である。
「冬着相場」を引く。

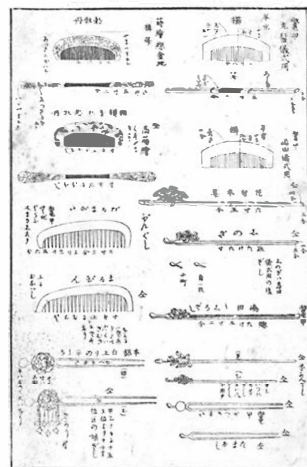
「京ざん」は並等三十八九錢より四十八九錢迄
近郷製上等五十錢より七十錢迄「寄二子織」
五十錢より一円位「細二子織」一円より一円
三十錢位「瓦斯糸織」一円二十錢より二円位

迄「諸糸瓦斯織」一円八十錢より二円四五十錢
とす商家の料まるもの多く之を用ゆまた「糸入
瓦斯織」は品位中等に位し子供や婦人に適當の
品にて中々体裁よきものなり値は一円二十三錢
より四五十錢上等一円八九十錢なり(後略)

「洋服の流行形及冬着柄行」でも、「モーニング」に
記述はないが、「ズボン」代価普通十四五円上等二十
円余「セピロ」普通十二三円上等十七八円「フロック、
コート」普通十五六円上等二十四五円「オヴワー、
コート」代価十二三円より二十円余「^{とんひ}鷲形外套」値十
円より十五六円上等物は(中略)値は二十円余と詳
細な値段の記載がある。このように本書は、明治中期
のさまざまなものの値段を知ることでできる資料とし
て貴重である。

最後に挿絵について触れておく。解題に「豊富な
図版を持っている点でまことに貴重」とあったように、
本書には豊富な挿絵が掲載されている。「櫛笄簪類」
と「靴」の挿絵を掲げておく。本文と相まって読者に
事物の具体的なイメージを与えることに大きな効果
を上げている。時には本文の記述を補うこともあり、
「靴」には「其他靴の話は図に代へて略しぬ」とある。

さて、最初に書いたように本書の刊記には「定価
二十五錢」の朱印が押してある。この値段を本書で
求めるならば、涼提燈の「並品二十五錢より上等五円
まであり」の並品にあたる。いかがなものであろうか。



櫛笄簪類(7丁裏)



靴(27丁裏)